

婦人科の臨床実習を選択した第6学年48名を対象として質的研究を行なった。質的研究の原理基盤は構造構成主義的質的研究法(SCQRAM)を採択し、実際の分析手法はSCATを用いた。「日誌」上のコメントを大谷のSCATフォームのテキスト欄に記入し、テキスト中の語句をコード化してテキスト外の概念と合わせ、ストーリーライン(SL)を構成した。次に、そのSLで説明しうる「日誌」コメントがコメント全体に占める割合を算出した。

【結果】「5月前半までの<緊張>・<発見>の時期を経て5月後半から<慣れ><中だるみ>が徐々に増える。やがて6月後半からは<迫り来る現実>により関心の方向がBSLから座学へとスライドしてゆく」というSLが作成された(<>内は概念)。このSLは48名中44名(91.7%)のコメントを説明しうるものであった。

【考察】5月前半までは関心のベクトルがBSL自体やBSLから発生する医学的疑問に向いているので臨床参加型実習をそのまま押し進めていけばよいが、慣れに起因する5月以降の意欲停滞期には学生の関心の方向に留意して外発的動機付けも導入しながら指導してゆくプログラムが必要であると考えられた。

P2-39.

医学科学生の医療面接実習における「共感」に関する検討 — 模擬患者への質問紙調査から —

(総合診療科)

○原田 芳巳、平山 陽示、山口 佳子
和久田佳奈、井村 博美

(総合診療科、北海道大学大学院医学研究院医学教育推進センター)
大滝 純司

【緒言】医学生のコミュニケーション能力の評価として行われる医療面接の客観的臨床能力試験(OSCE)では、「医学生が共感しているか」を模擬患者(SP)や教員が評価している。そのOSCEで共感性を評価する方法の妥当性を検討した報告はない。我々のこれまでの研究から、SPが「共感してもらった」と感じることに言語的/非言語的コミュニケーションの間には何らかの関連がある可能性が示唆された。

【方法】医学科5年のSP参加型医療面接実習で、

各実習グループにつき2名の学生が医師役でロールプレイを行った。2016年4月12日から2016年2月14日まで計18グループ36名の学生の医療面接について検討した。実習終了後にSPに質問紙調査を行った。質問項目は、2015年度にSPを対象に実施した「どの点に共感してもらったと感じたか」に関する半構造化面接調査から作成した。

【結果】のべ36名のSPから回答が得られた。「冒頭で『よく話をきいてくれた』」(中央値(四分位範囲)3(2-3))、「声の大きさやわかりやすさは適切だった」(4(3-4))、「視線を合わせてくれた」(4(3-4))、「態度が適切だった」(4(3-4))、「話したいことを言えた」(3(2-3))、「共感の言葉が聞かれた」(3(2-4))、「全体を通して共感してくれた、と感じた」(3(2-4))であった。「全体を通して共感してくれた、と感じた」に対して相関が認められたのは、「冒頭で『よく話をきいてくれた』」(R=0.64)、「視線を合わせてくれた」(R=0.41)、「態度が適切だった」(R=0.47)、「話したいことを言えた」(R=0.55)、「共感の言葉が聞かれた」(R=0.71)であった。

【考案】SPが共感的と感じる医療面接には「共感の言葉が聞かれた」が最も相関した。しかし、冒頭での開放型質問、態度、傾聴などとの相関も見られ、SPが共感的と感じるには多様な言語的/非言語的コミュニケーションが影響していると考えられた。

P3-40.

MNAzymeを用いた外来で可能なhuman papilloma virus 検出の試み

(医学部医学科4年)

○裴 賢哲、兼重 彩夏
(分子病理学)

金蔵 孝介、黒田 雅彦
(東京工業大学：生命理工学院)
嶋田 直彦、丸山 厚

【本研究の目的】子宮頸がんは若年女性に多く発症する悪性腫瘍であり、human papilloma virus (HPV)、特に高病原性HPV(16, 18など)への感染により発症する。HPVは感染するとウイルス由来遺伝子E6およびE7を発現し癌抑制遺伝子p53とRbの機能を抑制することにより癌化を促進することから、これらのHPVへの感染の有無を早期に検出すること